13世紀前・中期の讃岐国善通寺における造営活動の様相

中世讃岐国善通寺における造営活動の研究 その1

ON THE PHASES OF THE CONSTRUCTIONS OF THE ARCHITECTURES
IN ZENTSUJI-TEMPLE IN THE EARLY AND MIDDLE 13TH CENTURYA study on the constructions of the architectures
in Zentsuji-temple in the medieval ages Vol. 1

山之内 誠*

Makoto YAMANOUCHI

An examination of historical sources on Zentsuji-temple reveals the following things about the construction of the temple in the early and middle 13th century :

- Until the late 12th century, it was almost impossible to repair or construct the architectures in Zentsuji-temple by themselves because of the obstruction by Toji-temple which managed Zentsuji-temple, or by Kokuga, local government.
- But in the early 13th century, the construction of the Kodo-hall and the Jogyodo-hall was achieved by Shingon, a priest of Toji-temple.
- And in the middle 13th century, the construction in Zentsuji-temple became to be carried out by themselves through Kanjin (a method of gathering contributions) , and so on.

Keywords : Zentsuji-temple, Toji-temple, Zuishinin-temple, Kokuga, 13th century, Shingon

善通寺, 東寺, 随心院, 国衙, 13世紀, 親鸞

1. はじめに

本研究の目的は、中世の讃岐国善通寺における伽藍修造の性格を考察することにある。善通寺は弘法大師空海を生み出した佐伯氏の氏寺として7世紀に創建された、古代以来の由緒をもつ寺院だが、中世においては大きく見れば、13世紀前～中期と、14世紀中期の2度、比較的大きな伽藍の修造が行われたことが知られている。なかでも後者は善通寺誕生院に住した宥範による本格的な復興事業で、まさにこのとき、中世の善通寺は寺観の面でも経営面でも、最盛期を迎えたと言える。本稿では、これとは性格が異なるとされる前者の造営について、その造営主体が誰かを明らかにするとともに、中世における伽藍復興のなかでこの造営がどのように位置づけられるかを考察する。

中世寺院の造営の様相は、これまでに東大寺や東寺などの中央の大寺院については、膨大な史料を手がかりに造営組織の面に至るまである程度明らかにされてきたといえるだろう。しかし、地方の寺院については史料が少なく不明な点が多いため、これまであまり研究が蓄積されてこなかった。本研究で扱う善通寺も、史料的制約が大きい点では他と異ならないが、ここでは主に寺院の経営面に視点を据え、善通寺を取り巻く社会的背景との関わりをなかで、伽藍の造営事業がいかに位置づけられるかを考察することで、建築の社会的

側面に迫りたいと考えている。そして別に並行して行う、絵画史料の分析等から得られる建築物の具体的様相と対照することにより、地方の顕密寺院における、伽藍の中世的展開を多面的に描き出すことを今後予定している。

2. 先行研究

本稿に特に関わりの深い先行研究を簡単に紹介しておく。まず、善通寺の歴史全般について記したものに、善通寺市企画課編『善通寺市史』第一巻(1977年)がある。とくに善通寺文書に基づいて荘園の経営や本所との関係の分析がよくなされており、本研究においても文書の解釈そのものについては概ねこれに依っている¹⁾。しかし、市史では、本稿で主題とする伽藍復興の性格やその担い手にまで踏み込んだ考察はない。次いで個別研究では、網野喜彦『中世東寺と東寺領荘園』(1978年、東大出版会)の第一章「中世寺院への転生」があげられる。ここでの主題はあくまでも東寺の中世寺院への転生であるが、13世紀前半に長者親鸞により末寺たる善通寺の支配を回復した背後関係が考察されており、啓発されるところ大であった。

また、具体的な伽藍の建築の形態についての研究も存在し、善通寺所蔵の「一元保差図」および「善通寺伽藍図」(いずれも鎌倉時代後期)と、鎌倉時代前期の僧道範による『南海流浪記』の記事との

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, University of Tokyo, M. Eng.

比較を行っているものがあるが、これらについては拙稿「絵画史料による讃岐国善通寺二重ノ寶塔の分析」²⁾において既に触れており、本稿の主題ともずれるので、拙稿を参照されたい。この他、宮上茂隆氏は本薬師寺金堂が11世紀末に善通寺に移築されたとし、この頃善通寺内で大規模な造営があったとするが³⁾、この説は想像の域を出ておらず承服できないので、稿を改めて反論することにする。

3. 『南海流浪記』にみる造営事業

『南海流浪記』は、高野山の本寺の執行代であった道範が、本寺と末院伝法院の間の争いにより善通寺へ配流されたときに記した紀行文である。この仁治4年(1243)3月21日条において、当時の善通寺伽藍の様子を克明に記したなかに以下のような文言が存在する⁴⁾。

七間ノ講堂ハ、破壊^{シテ}後今新^ニ造営。五間常堂同新^ニ造立。
「今新^ニ造営」という文言からは、今まさに造営中であるか、もしくはそう遠くない過去に造営されたことが読みとれるが、このすぐ後に「同日午ノ刻。於^ニ講堂^ニ有^ニ法花講^ノ。」とあるので、講堂については既に完成していたと考えられる。また「常堂」とは常行堂のことであろうが、後述する善通寺を取り巻く社会的経済的情况から考えて、講堂と同時期の造営と考えられる。また、同じく『南海流浪記』中、「誕生院縁起之事」の節には、以下のような記述がある⁵⁾。

于^レ爰行並^{イロ}上人。去寛元三年木造御影建立之時。即與^ニ寺僧^{共ニ}評議^{シテ}、於^ニ此御誕生所^ニ。建立一堂。可^レ安置之云々。因^レ茲或ハ勸^ニ自力^ヲ。或唱^ニ勸進^ヲ。以^ニ今年建長元年正月十日^ノ手斧初。同二月二日棟上。大公沙^イ(阿)彌陀佛。同年五月一日^イ。寅時有^ニ鎮壇^ノ。阿闍梨道範。
以^ニ我功德力^ヲ。大師加持力。及以^ニ法界力^ヲ。
願我成^ニ吉祥^ノ。今此一伽藍。奉^ニ慈氏下生^ノ。
與^ニ隆諸佛法^ヲ。利^ニ益諸衆生^ノ。

大勸進阿闍梨道範

これは弘法大師空海が生まれた場所とされる御誕生所(善通寺伽藍に隣接。)に、木造の御影を納める仏堂を建立したときのことを記録したものである。寛元3年(1245)、行並(蓮)上人が木造御影を建立した際、道範が寺僧等と共に評議して御影を安置する堂を建立することに決し、寺領からの収入や勸進で得た収入により、建長元年(1249)に建立されたことがわかる。また鎮壇の際の願文から、道範が大勸進の立場にあったこともわかる。しかしながら、行並(蓮)上人や大工⁶⁾沙(阿)彌陀佛がいかなる人物かはよくわからない。

この時期に造営活動があったことを具体的に裏付ける史料はこの程度であるが、少なくとも単なる日常的な補修を越えた、ある程度大きな事業であったことは確かであろう。果たしてこの造営は善通寺にとってどんな意味をもつものだったのだろうか。それを理解するには、この時期までの善通寺をとりまく社会的経済的状态を把握することが不可欠であるから、以下ではもっと前の時代まで遡り、上記の造営に至るまでの善通寺の様相を順にみていくことにする。

4. 13世紀初頭までの善通寺

11世紀から13世紀初頭の善通寺の経営状態は、『善通寺市史』で概ね考察されているが、本稿の議論の前提として重要なので、本節において造営への影響に着目して改めてまとめておくことにする。

a. 本寺への依存と国衙との関係

善通寺の創建については、先学の研究において7世紀に遡るとされ、佐伯氏の氏寺として四天王寺式の伽藍配置で建立されたと想定されている⁷⁾。しかしながら、創建後の伽藍の変遷はほとんど史料がなく不明である。文献史料の上で善通寺の存在が最初に確認できるのは、長保2年(1000)の「東寺宝蔵焼亡日記」⁸⁾の記事であり、ここでは「諸國末寺公驗并莊々公驗等」として「讃岐国善通寺公驗」を焼失したことが記されている。このことからすでに10世紀末には、善通寺が東寺の末寺になっていたことが確認できる。当時の善通寺の様子は、寛仁2年(1018)5月13日付で権別当政安から本寺に宛てられた「讃岐国善通寺司解案」⁹⁾により垣間見ることができる。

一請被令下給御告書、修理寺家破壊事

右寺成本寺別院以後、雖送年序、寺司不修理一所者、寺司不了也。望請被下給御告書、以令勤仕破壊、并被令辨申年々地子物辨等、但去年寺田所免四町余也即所當地子物貳拾余石也、而破壊修理料更以不可足、加以廿余石内、寺家例用十余石者、大以不足、因之國勘之旨難通、就中僧令命作一町不辨申其地子者不足煩尤有此、被聞於國衙、以可省寺司責、仍請裁

これは、本寺の裁を請うべき4箇条の一つとしてあげられたものである。善通寺が東寺の別院(末寺)になってから年月を経ているが、その間寺司が一箇所も修理しないのは寺司の怠慢であるから、破損を修理し、年々の地子物を辨申するように御告書を下されたいとしていながら、四町の免田からとれる20石あまりの所当地子物では破損の修理料として不足であり、その上この内10石あまりはその他の寺家の通例の用途に使用するから、全く地子物が不足していて、国衙に認貢されても逃れられないことや、中でも僧の令命が一町の田を作りながら全く地子を弁済しないことが不足の大きな原因になっていることを挙げ、結局、本寺から国衙に実情を伝え、寺司の責任を省くようにしてほしいと訴える内容になっている。ここでは次の3点に注目したい。一つは、言うまでもなく、経済的困難により修理料が確保できず、東寺別院となって以来、一度も修理を行っていない事実である。このためおそらくは伽藍が相当荒廃していたであろうと想像できる。二つ目は、国衙と交渉するにあたり、本寺たる東寺を通じて行っていることである。こうした本寺への依存の度合は次第に低くなり、鎌倉時代以降は本寺との対立を経て、やがて自立していく経過を辿ることになるが、このことは造営事業の主体を考える上で重要である。三つ目は、寺の修理を怠っていることに関して、国衙から責任を追及される関係にある点である。『善通寺市史』の指摘によれば、こうした国衙の管理は、善通寺が讃岐国の準官寺として国衙の宗教行事に携わり、同時に国衙から経済的援助を得ていることと表裏一体のものと考えられる¹⁰⁾。

b. 派遣される別当と本寺の収奪

11世紀後半になると、善通寺と東寺の本末関係に内在する問題点が出出てきた。善通寺は、東寺長者に任命されて派遣された別当が管理していたのだが、その別当が田畠地子物を悉く京都に運上してしまい、末寺の経営を顧みないという状態に陥るのである。延久4年(1072)正月26日の「讃岐国善通寺所司等解」では、このような別当の非法を止めさせるように東寺長者に対して訴え出ているのだが、その中には次のような件がある¹¹⁾。

件寺者弘法大師御先祖建立道場、大師聖靈誕生之砌也、而年序

推遷、堂舎悉以破壊顛倒、就中去々年之大風、五重塔一基・三間一面常行堂一字已以顛倒也、於塔者構造無力、常行堂者以古材木、近來擬改建立之處、件延譽非道爲宗、全不留置燈油佛聖并修理工等、因茲寺中方々佛事修理堂舎等殆可闕急、去々年(延久2年・1070)の大風で五重塔と常行堂が倒れたのだが、五重塔を再建する財力は無く、常行堂については古材木を用いて修造に着手したが、延譽(東寺から派遣された別当)が燈油佛聖並びに修理工等を留め置かないものだから、仏事や修理が悉く停滞しているというのである。この文書に外題として記された東寺の回答には「件事依程遠、暗難知子細、國守觸申者、自然裁定歟」と記され、遠くて子細がわからないから国守に申し出れば裁定してくれるだろう、という内容であった。この誠実とは思えない対応の背景には、この別当延譽による苛酷な収奪が、東寺自身の利益に繋がっていることが想定できよう。すなわち、東寺側では末寺善通寺を所領として位置づけ、自身の経済基盤として積極的に利用しているのである。この後、善通寺所司等は数度にわたりこの件について本寺や国司に訴え、別当の交代などを要求しているが¹²⁾、改善された形跡はなく、結局、応徳元年(1084)の国司庁宣において「可知本隨別當所勤勤仕雑事」という裁定がなされて善通寺側の要求は受け入れられなかった¹³⁾。このように11世紀においては、本寺の収奪が造営活動を妨げる主要な要因であったと考えられる。

c. 寺領一元化と国衙の支配

12世紀に入ると、荘園の拡大により国衙の収入が減少したことを受けて、一國平均役が課せられるようになり、善通寺においても往古から公事を免除されていた寺家所司、三味噌、ならびに承仕住人等に国役が賦課される事態が生じ、当然この問題を巡って国衙と東寺・善通寺との間に争論が起こった¹⁴⁾。この事態を受けて、保延4年(1138)に国司藤原経高は散在していた寺領の一元化を行った¹⁵⁾。その詳細は『善通寺市史』に詳しいので省略するが、要はこの寺領の実態は、国衙領の一部が寺家に官物を納入する地域として指定されたものにすぎなかったようで、土地と作人に対する支配力は大きく後退した¹⁶⁾。そして結局10年ほどでこの一元領は再び散在に返されたが、このとき元通り寺領が返らず、さらには以前にも増して苛酷な収奪が国衙によってなされることとなった。永暦2年(1161)に所司等は、国役公事の停止と寺領の返還を国司と交渉するように本寺へ求めているが、そのなかで窮状を次のように述べている¹⁷⁾。

然而當御任在家役難堪故、住僧等皆以逝去畢、纔殘止所司三昧、被國事打立、恒例佛事、已以及斷滅、加之、志侍嶋ハ是往古寺領、大師殊有志思食事、所被寄置也、然而近來被國領之条、甚以大愁也、如此寺領被押取之間、往古佛事難勤仕、又堂塔僧房、雖破壞顛倒、修理修造無力、佛聖燈油雖及闕急、一鉢底空天不能調進、

住僧等は皆在家役に堪えかねて逃げだし、僅かに残った所司や三味噌等は国事に徴されて、恒例の仏事は断絶に及び、また寺領の志侍嶋が国衙に押し取られて返ってこないため、仏事を勤め難く、堂舎僧房は破壊転倒しているが修造する力がなく、さらには佛聖燈油にも事欠く状態だということである。所司等は3年後の長寛2年(1164)にも全く同様の訴えを本寺に伝えているが、そこではさらに奉免の春田十三町にも新たに国役が賦されたことが記され、事実上収公されたと理解できる¹⁸⁾。したがって、国衙による収奪はその厳しさ

を増す一方で、改善には向かわなかったと考えられる。当時の国衙は在地豪族たちにより運営されており、在地領主化を目指す彼らが積極的に寺領に収奪の手を伸ばしていったものと思われ、事実上寺領は国衙の支配下に入ったと考えられる¹⁹⁾。当然、伽藍の荒廃は一層進み、造営活動は全く停止していたものと考えて間違いなからう。

d. 東寺による善通寺支配回復への活動

13世紀に入ると、東寺は善通寺の支配を回復すべく、国衙と交渉をはじめた。寛喜元年(1229)に東寺へ下された官宣旨にその様子がよく表れているので、ここに引用する²⁰⁾。

而末代史、動成国衙之妨、奸謀之輩、恣致虜掠之企、因茲建仁三年國務之時、停止國司之妨、可附寺家之由、被廳宣畢、而權門之輩、望取件寺、僅雖進年貢之上分、狠不隨寺家之下知、仍令言上子細之後、欲停止掠領之處、去逆亂之後、前任之間、忽以無道橫令押領、已奪祖師之桑梓之遺跡、爲他人之領、偏取佛聖香花之用途、宛從僕之資、自宗之門徒皆及悲歎、當寺之禪侶莫不嗚咽、然今逢憲政之國務、既蒙不日之廳裁、永停止國衙之濫妨、可返附本寺之由、去元仁元年十一月、被成廳宣畢、

これによると、建仁3年(1203)に国衙の掠奪を停止するように東寺が国司に訴え、それに対して国司の妨を停止し、善通寺を東寺に付すという内容の庁宣を東寺は得ている。その後、年貢の上分は確保していたようだが、「去逆亂」すなわち承久の乱(承久3年・1221)の後には「權門之輩」の押領に遭い、前任の国司の間、全く無道に押領されてしまったというのである。『善通寺市史』では、この「權門之輩」を在京の国司のことと考えており、承久の乱以前、僅かに年貢の上分を納めていたというのは、前に一元化のところで述べたような、国衙領の一部を寺領と定め、そこから納入される官物の一部を寺家に納める形態の復活で、ここでいう押領とは国守が寺家に納入すべき官物を送ってこないことだと分析している。また寺領指定地域の支配は国衙に属するから、寺家の下知に従わないのは当然で、それを東寺が訴えているところに寺領支配を我がものにしようとする東寺の積極的な意図が読みとれるとしている²¹⁾。引用箇所末尾から、その後国司が替わり、「憲政之國務」の下、元仁元年(1224)には永く国衙の濫妨を停止し、善通寺を東寺に付す旨の庁宣を受け取り、善通寺領がようやく一応の安定をみた様子が窺える。

このようにみえてくると、善通寺領は史料上確認できる11世紀以来、11世紀後半には本寺からの収奪が目立ち、12世紀に入ると国衙の苛酷な収奪を受けるなど、常に内外からの収奪にさらされ、非常に窮乏している状況が窺える。それに12世紀以降、本寺からの収奪が無くなったというわけではない。承元3年(1209)の庁宣は、生野郷内重光名見作田6町の所當を理趣三昧勤修及び御影堂修理にあてることを留守所に通達するものだが、これには「凡當寺徒雖募數十町之免田、別當以下恣企私用、佛聖燈油追年闕乏」と記されており、それを理由にこの所當を三味噌の沙汰に付している²²⁾。これ以後は、徐々に同様の形で別當などの本寺側の勢力から独立した経済的基盤を寺家が獲得していくことになるが、本寺からの社会的経済的自立を遂げるには14世紀を待たねばならず、この段階では、細々と日常的な修繕を行うのが精一杯で、ある程度大規模な造営事業は何らかの外的支援がない限り行い得ない状況であったと考えられる。

5. 親戚僧正の功績

a. 親戚による善通・曼荼羅寺の支配回復²³⁾

前述の寛喜元年の官宣旨の後段は、次のように記されている²⁴⁾。

寄附以後、本寺二箇月佛聖用途捌割、三月御影供菓子等、當時所令勤仕也、至于永代、可無懈怠之由、且納請文於寺庫畢、早爲寺領、雖濟年貢、附親戚門跡、可領掌進止之由、欲被仰下、當時者、縱無違亂、後代者、定有其煩歟、仍申賜鳳詔、欲備龜鏡而已、

元仁元年の庁宣により、善通・曼荼羅寺に対する東寺の領有権が保証され、本寺二箇月佛聖用途捌割や三月御影供菓子等が順調に納められている様子が記されているが、現在とはとえ問題なくとも、後世何時妨害があるかわからないので、善通・曼荼羅寺を東寺長者親戚の門跡相伝とするように国宣を頂きたいという内容の申請が東寺からあったことがわかる。この希望は認められ、以後は親戚の門跡に相承されることになった。

親戚は、仁平元年(1151)大江親光の子息として生まれたのだが、これは即ち幕府の重臣大江広元の甥にあたる。それだけではなく、親戚も広元とともに中原広季の猶子となっていたため、二人は義理の兄弟でもあった²⁵⁾。広元は守護地頭の設置を頼朝に献策したことで知られるが、頼朝の死後も將軍の顧問格として北条氏と結んで幕政を運営した人物である。したがって、網野喜彦氏が指摘しているように、承久の乱以降、嘉禎2年(1236)に他界するまで、親戚が東寺において大きな勢力をふるった理由は、この出自を背景にして承久の乱に勝利した幕府の強力な後盾を得たためと考えられる。親戚は承久の乱後はまだ暫く二長者のままであったが、網野氏の指摘によれば乱の直後から東寺の実権を握ったようで、実効のあった元仁元年の庁宣に満足することなく、安貞2年(1228)に一長者になると翌年(寛喜元年)すぐに前述の官宣旨を得て善通・曼荼羅寺を自身の門跡に附することに成功した²⁶⁾。親戚は小野にある随心院の第7世であり、彼の門跡とはすなわちこの随心院を相承する者を指す。したがって、善通・曼荼羅寺の本寺はこのときから事実上随心院へ移るが、親戚以後も随心院の歴代はほとんどが東寺長者を兼ねていたため、東寺との関係も完全に切れたわけではない²⁷⁾。

b. 東寺における親戚の功績

このほか、鶴岡八幡宮社務職となり幕府と密着していた定豪を東寺三長者に抜擢したのも親戚だったようで²⁸⁾、関東の影響力を思わせる活動を展開した。そして、天福元年(1233)には仏師康勝法眼作の大師木像を西院に安置し²⁹⁾、嘉禎2年には灌頂院弘法大師御影供を門徒僧綱の巡役として毎年勤行することとして、これを遁避したものは永く門徒を召放つと定めた官宣旨を得ている³⁰⁾。網野氏はこれらの事績から、親戚は東寺を弘法大師信仰の中心にしようとしたと規定し、東寺の中世寺院への転生を「法宝」の上で達成したと評価している³¹⁾。また親戚は、堂塔修理の面でも功があり、嘉禎元年に官宣旨により修造料国として肥後国を獲得している³²⁾。

c. 善通寺領の地頭職停止

『吾妻鏡』によると、鎌倉幕府は安貞2年(1228)に善通寺領の地頭職を停止している。これには、

而近年被_レ補_二地頭於彼領_一之間、寺用闕如之旨、依_レ捧_二疑状_一殊有_二其沙汰_一、被_レ止_二之云々、

と記されており³³⁾、おそらく承久の乱以降設置されたであろう地頭

職を寺の費用が不足するという寺側の訴えにより停止するとしている。これは前に述べたように、元仁元年(1224)の庁宣で善通・曼荼羅寺に対する東寺の領有権が認められ、一定の効果が上がっている時期のことであり、さらに翌年、親戚の門跡に付すべく官宣旨を得る経過を辿るのであるから、当然東寺が積極的に訴え出たものと考えられ、その背後には親戚の影響力が存在するとみて間違いなからう。このように、積極的に末寺善通寺の経営に親戚が乗り出している様子を垣間見ることができるのである。

d. 神崎・吉原庄の地頭職の獲得

善通寺領に隣接した神崎・吉原庄は將軍家祈禱所に宛てられていたが、この地の地頭職は、親戚の後随心院を継いだ厳海から、弁僧正宣厳へ寛元2年(1244)に譲られており、建長2年(1250)には厳海によって厳恵に譲り直されている³⁴⁾。なお、宣厳、厳恵とも厳海の後、随心院を継ぐ人物であるが、厳恵は時の將軍頼朝の親戚にあたるため、「如御祈尤可有便宜」という理由で「申合之旨」あってこの措置がなされたことが随心院文書に記されている³⁵⁾。また、この譲与の確認のために、建長4年には幕府から地頭職を左大臣法印(厳恵)に付す旨の下知状が発給されている³⁶⁾。いずれにしても、厳海以降、この地頭職は随心院門跡に相承されたようであるが、問題は寛元2年の時点で既にこの地頭職が御家人の手を離れ、随心院の手にあった点にある。果たして何時、随心院に渡ったのか。

この答えは、この地頭職のもつ、随心院にとっての意味合いのなかにあるだろう。神崎・吉原庄の地頭職が善通寺の支配と一体のものとして認識されていたことは、単に隣接地であるというだけでなく、上記の下知状が善通寺文書として伝わっていることから窺える。したがって、この地頭職が随心院門跡の手に渡ったのも、善通寺の支配と関係あるとみていいだろう。だとすれば、随心院がこの職を手に入れる契機も、善通・曼荼羅寺の支配回復に求められると考えられるのである。善通・曼荼羅寺は寛喜元年に親戚門跡に付され、事実上随心院が本寺となったとはいえ、尚しばらくは東寺末寺としての顔を失っておらず、建長4年(1252)9月の庁宣にも「爲東寺末寺、前大僧正親戚門跡相傳之由」と記されている³⁷⁾。したがって、随心院以外にも様々な勢力が存在する東寺内において、特に随心院が隣接地の地頭職を得ている事実は、善通・曼荼羅寺が親戚の門跡に付されたことと無関係ではあるまい。おそらくは寛喜元年の官宣旨取得以降、この地頭職が随心院に渡ったものと推定できる。詳細は明らかにしえないが、任免権が幕府にあることも考慮すれば、幕府に特別に近かった親戚が、善通・曼荼羅寺の支配に関連して入手したと考えるのが最も妥当であろう。

6. 講堂及び常行堂の造営における親戚の影響

さて、このように背景をみても、『南海流浪記』にみられた講堂・常行堂の造営にも、親戚の影響があったのではないと思われるが、残念ながら確実にそれを示す証拠はない。しかし、これまで述べていくつかの傍証を整理すれば、親戚の影響下で行われた造営であることがほぼ確実であることがわかる。

①造営時期の下限については、前述のとおり、道範が見た仁治4年(1243)には講堂が完成していたと考えられることから、少なくともこれ以前に設定できる。

②造営時期の上限については、前述のとおり、『南海流浪記』の

「今新造営」という文言からみて、仁治4年をそれほど遡らない時期と考えられる。加えて前にまとめた通り、親蔵（東寺）による支配回復以前の普通寺は、長期にわたり国衙や本寺から苛酷な収奪にあっており、とても造営事業に力を注げる状態ではなかったと考えられる。したがって、この造営は元仁元年(1224)の庁宣以降のことと考えられる。

③親蔵は、普通・曼荼羅寺の支配回復の実現にとどまらず、普通寺領の地頭を停止し、また隣接する神崎・吉原庄の地頭職を獲得したと思われ、末寺経営に非常に積極的だったと考えられる。

④後述するように、1240年代後半から本寺の支配を排除し、経済的自立を目指す動きが普通寺でみられるが、嘉禎3年(1236)に親蔵が他界したのをうけて随心院門跡を継いだ蔵海の在任中(建長3年・1251まで)にこのような現象が起きていることは、蔵海の末寺支配が収奪的な性格であったことを裏付けており、蔵海が造営事業を進めたかどうか、甚だ疑わしい。

⑤後述するように、誕生院に一堂を建立するときには、高野山から流されてきた道範が大勧進となり、中心的な役割を果たしたと考えられるが、この事実は、それ以前には普通寺側にこれだけの力を発揮する人材がいなかったことをも示しており、講堂・常行堂の造営が普通寺の自主的なものとは考えづらい。

以上の理由から、講堂と常行堂は親蔵の影響下で、直接的には親蔵から派遣された別当の管理の下、造営が進められたと考えられる。おそらく親蔵にとっては、末寺を自らの門跡に付した以上、その経営について対外的に責任を感じていたであろうし、東寺を弘法大師信仰の中心として「法宝」面で発展させた人物だからこそ、末寺の宗教施設としての整備にも心を配ったのではなかろうか。

7. 本寺支配排斥の動向

普通寺は弘法大師が唐へ留学する前に母へ描き送ったとされる御影を所蔵していたことから、13世紀に入ると度々これを天覧に供する機会があり、その度に謝礼として所領(付近の公領)を寄進された。史料上の初見は前に述べた承元3年(1209)の庁宣による生野郷内の6町の所當を三昧僧の沙汰に付すというものであるが、これは後鳥羽上皇の歡覧に供した際、時の知行国主藤原頼実から寄進されたものである³⁸⁾。この後、嘉禄元年には良田郷内見作田3町を御影堂修理料にあてる庁宣を得るが、これも御影を拝した知行国主藤原頼実が寄進したものである³⁹⁾。このほか、宝治3年(1249)には寺の荒廃している様を聞き及び驚いた九条道家が、生野郷西畔を普通寺領に准じ、殺生禁断とし公田12町を修造料にあてるという庁宣を発給している⁴⁰⁾。ここで注目されるのは、承元3年と宝治3年の庁宣には、ともに本寺の妨を禁ずるという内容が含まれていることである。前に述べたとおり、承元3年には東寺は国衙に対し普通寺の安定した支配を勝ち取っていなかったから、寄進する国衙の側にとっても本寺の妨を排除する理由があったことは納得できる。そして嘉禄元年の庁宣では、親蔵の力を背景に普通・曼荼羅寺を東寺に安堵する庁宣が発給された翌年であっただけに、本寺たる東寺を意図的に排除するような文言を盛り込むような情勢ではなかったものと思われる。ところが、宝治3年に再び本所の妨を排除する文言が記されたことは非常に意味深い。おそらくは寄進される普通寺側の意向によるのだろうが、やはり本寺による収奪が寺院経営の妨になって

いることを反映しているのだろう。これ以後は、弘長3年(1263)の庁宣にも「本寺之妨」を禁ずる文言がみえ⁴¹⁾、建治2年(1276)の龜山上皇院宣においても「至于郷務者、金堂法花兩堂供僧等可進退領掌」として寄進した郷務を供僧に付している⁴²⁾。こうした動向は、親蔵の復興事業の後間もなく、本寺が以前のような収奪を専らとする経営方針へ移行していったことを示すが、また同時に、普通寺が本寺の力の及ばない形で徐々に所領を獲得し、経済的自立へ向かう過程をも示していると考えられる。

8. 誕生院の仏堂造営の様相

「3」でふれた誕生院における仏堂の造営は、以上のような情勢のもとで行われたと考えられ、親蔵による造営の時とは様相が異なるようである。その最大の特徴は、道範が大勧進として勧進を行い、造営していることである。ここで言う大勧進が如何なる権限をもつ立場かは不明だが、造営の中心的な役割であることは確かであろう。もちろん講堂などの親蔵による造営の財源は明らかでなく、勧進を伴った可能性もあろうが、その場合もあくまでも本寺が主導したであろうから、この造営において、配流され今や普通寺僧の立場にある道範が中心的な役割を果たしたことには重要な意味がある。造営を経済的な面で支えるには、有力者から経済的援助を引き出すだけの人脈が必要で、一地方寺院にそれだけの人材がなかなか存在し得ないことが伽藍造営の上での難点であることは、後に宥範が普通寺伽藍の大造営のために招聘されたいきさつをみても明らかである⁴³⁾。道範は、高野山金剛峰寺で執行代を勤めた学生であり、普通寺においても活発に講席を開き、僧侶たちに教えを授けるなどの活動を通じ活躍しているので⁴⁴⁾、普通寺にとっては本寺からの自立の第一歩を踏み出す上で非常に貴重な存在だったと考えられるのである。

それでは、道範の造営を経済的に支えたのは誰だろうか。確たる証拠はないので推測を加える以外ないが、それは幕府御家人の安達景盛あるいはその周辺人物であろうと思われる。というのも、道範が普通寺へ流される原因となった伝法院との争いに、景盛が関与していたと思われるからである。大蓮房覚智といわれた景盛は、源頼朝以来の有力な御家人で、4代執権北条経時と5代執権北条時頼の外祖父として権勢を振るった人物で、承久元年(1219)に將軍実朝の死により出家し、やがて高野山に入寺して金剛三昧院を建立、高野入道とも称され、衆徒とは深い関わりを有していた⁴⁵⁾。そして出家後も、高野山にいながら度々幕府の諮問に応じ、幕政の中樞を担う立場にいた。当時の幕府は後嵯峨天皇の即位をめぐる九条道家と陰悪な関係になっていた⁴⁶⁾、道家を有力な外護者とする伝法院座主の行遍に対しても、景盛は敵対心を持っていたと考えられるが、加えて景盛は個人的にも、行遍に対し灌頂を請うて断られた経験から恨みを抱いており、東寺内での行遍の勢力を牽制したという⁴⁷⁾。したがって景盛は、ともに行遍に反発する者として衆徒と結びつき、伝法院との争いにも関わっていたと考えられている⁴⁸⁾。つまり景盛と、この争いの中心人物道範とは、高野山において打倒行遍を掲げる同志であったと考えられるのである。

先に述べたように、道範らにより御誕生所に一堂を建立することが決したのは寛元3年(1245)のことで、実際の造営にとりかかる建長元年(1249)正月までの間、継続して勧進等の資金集めが行われたと考えられる。この時期は景盛にとって、外孫経時・時頼が相次い

で執権に就任し(1242,46)、宝治合戦で三浦氏を滅ぼして安達氏の隆盛の基礎を築き(1247)、宝治2年(1248)5月29日に世を去るまで、幕府内で絶大な権力を得た時期に当たる⁴⁹⁾。したがって、流罪人の身の道範にとって、自分の立場に理解のある、最も頼りにできた人物が景盛であったと考えられよう。

もとよりこれらは推測に過ぎないが、いずれにしても道範が中心となって勧進を行ったのは、こうした人脈が期待できたために他ならないだろう。つまりこの時代、すなわち13世紀中期の造営は、普通寺自身の手で勧進と寺領からの収入により行われていたと考えられるのである。

9. まとめ

以上のように、普通寺は12世紀末までは本寺や国衙の収奪により経済的に疲弊し、修造はおろか日常の仏事にも支障を来すことが多かったが、13世紀に入って本寺の親蔵の威勢により国衙の支配から脱却し、講堂・常行堂などの再建が実現したと考えられる。ところが親蔵の死後、13世紀半ば以降は、本寺の干渉を避けて自立していく傾向がみられ、誕生院の仏堂や『贈宥範発心求道縁起』にみられる道憲の造営においても、寺領からの収入と勧進とによって、末寺が苦勞しながらも独自に資金調達しており、本寺の影響は見られない。このことは、以後ますます自立した経済基盤を固め、本寺に対する発言力を強めていき、やがて南北朝に入る頃には誕生院を拠点として本寺の干渉を取り除くことに成功する、普通寺の自立化の過程の初期段階を反映したものと考えられる。

普通寺における造営のあり方が、地方顕密寺院一般にあてはまるか否かは今後の検討課題であるが、荘園制の解体に伴い本寺の末寺に対する支配が弛緩し、末寺が自立化していく現象は、ある程度普遍的なものであろうから、他の寺院においても、時期的な差はあっても同様の道を辿るのではなかろうか⁵⁰⁾。

この後の自立化の過程と宥範による大造営及び絵画史料との対比については、稿を改めて記すこととしたい。

注

- 1) 但し伽藍の堂舎の分析については昭和7年に口かれた総本山普通寺綱『普通寺史』の内容と大きく変わらず、依然として充分とは言えない。
- 2) 『日本建築学会計画系論文報告集』516号所収、1999年2月。
- 3) 宮上茂隆『禁師寺伽藍之研究』(東京大学提出学位論文)1978年8月。
- 4) 校訂は『新校群書類従』第十五巻(1929年)所収のものに依った。
- 5) 同上。
- 6) 引用中の「大公」はこのままでは意味が通らず、異本に「大工」とあるので、こちらが正しいと判断した。
- 7) 松浦美智子「讃岐普通寺の創建について」(『文化財協会報』1957年)、藤井直正「讃岐普通寺伽藍の復原」(『史迹と美術』471号、1977年)。
- 8) 『東寺百合文書』の、『平安遺文』404。
- 9) 『東寺百合文書』里、『平安遺文』481。
- 10) 『普通寺市史』第一巻、P.321参照。
- 11) 『東寺百合文書』ま、『平安遺文』1071。
- 12) 『東寺百合文書』ま・ウ、『平安遺文』1072・1087。
- 13) 『東寺百合文書』あ、『平安遺文』1221。
- 14) 『東寺文書』隠・『東寺百合文書』ヒ、『平安遺文』1774・2015。
- 15) 『東寺文書』樂、『平安遺文』3290。
- 16) 『普通寺市史』第一巻、P.354参照。
- 17) 『東寺百合文書』カ、『平安遺文』3150。
- 18) 15)と同じ。

- 19) 『普通寺市史』第一巻、P.351参照。
- 20) 『普通寺文書』寛喜元年5月19日(『香川県史』第8巻所収)、官宣旨。
- 21) 『普通寺市史』第一巻、P.402-4参照。
- 22) 『普通寺文書』承元3年8月、讃岐國司廬宣。
- 23) 普通寺の近隣にある曼荼羅寺も東寺末寺だったが、12世紀に入ってから寺院組織が一つにまとめられ、普通寺別当の下に両寺から寺僧を出し合って所司が編成されていたようで、天永3年(1112)の東寺牒(『東寺文書』隠・『平安遺文』1774)以降は一組織として扱われている。『普通寺市史』第一巻、p.345-6参照。
- 24) 20)と同じ。
- 25) 『尊卑分脈』第四編(『新訂増補国史体系』所収)参照。
- 26) 網野喜彦『中世東寺と東寺領荘園』(1978年、東大出版会)P.104参照。
- 27) 随心院門跡は親蔵一蔵海一宣蔵一俊蔵一蔵恵(以下略)と相伝されていくが、中世を通じてほとんどが東寺長者に補任されている。『東寺長者補任』巻第三(『続々群書類従』第2史傳部所収)参照。
- 28) 網野氏前掲論文、P.105参照。
- 29) 『東宝記』第三、「西院」(東宝記刊行会編『国宝東宝記原本影印』(1982年、東京美術)所収)参照。
- 30) 『東宝記』第五、「灌頂院御影供」「為門徒巡役勤仕執事事」参照。
- 31) 網野氏前掲論文、P.106参照。
- 32) 『東宝記』第三、「当寺代々修造之事」参照。
- 33) 『吾妻鏡』安貞2年3月13日(『新訂増補国史大系』所収)。
- 34) 『随心院文書』建長2年3月3日、蔵海談状(東京大学史料編纂所所蔵の影写本を参照した)。
- 35) 『尊卑分脈』第一編参照。
- 36) 『普通寺文書』建長4年9月、閑東下知状。
- 37) 『普通寺文書』建長4年9月、讃岐國司廬宣。
- 38) 21)と同じ。『南海流浪記』参照。
- 39) 『普通寺文書』嘉禄元年4月、讃岐國司廬宣。尚『南海流浪記』には、「嘉禄元年九條禪定殿下攝録御時奉拝之。(中略)御下向之時。兔田三町寄進云々。」とあり、九条道家の寄進とされているが、庁宣の花押から知行国主は藤原頼実と知れる。『香川県史』第2巻、P.83参照。
- 40) 『普通寺文書』宝治3年3月、讃岐國司廬宣。
- 41) 『普通寺文書』弘長3年12月、讃岐國司廬宣寫。
- 42) 『普通寺文書』建治2年6月9日、龜山上皇院宣。
- 43) 『贈僧正宥範發心求法縁起』(『普通寺市史』第一巻所収)の奥書には、
 應永九年三月十七日於_普通寺誕生院之内助學院_撰_集之_畢。抑僧正宥源者、贈僧正宥範之上足、院跡之繼承也。自_幼少_依_常隨給仕之功_有_御物語_記_之畢。爰宥雅以_彼草本再記_之。
 と記されており、幼少から宥範に従った宥源が著したものをもとに、宥源の弟子宥雅が応永9年(1402)に撰じたことがわかる。したがって成立年代は応永まで降るものの、宥範の時代に近い記述内容に関しては同時代性が高く、信頼できる。これによると宥範が普通寺に招聘されたいきさつは次のように記されている。
 自_普通寺_人來_申ケル事ハ、彼寺已_及_大破_、再興_无_人、與_隆佛法_ハ、待_時、待_人非_ハ上人ノ徳功_、誰_補_彼破壞_乎。
 よって、伽藍の修造を行うには、然るべき時に然るべき人材が必要であり、普通寺内に人材がないために宥範が招聘されたことがわかる。
- 44) 『本朝高僧傳』巻第十四(『大日本佛教全書』所収)には、「愍啓、諱席_。諱_、諱四衆_。」とある。
- 45) 『国史大辞典』参照。
- 46) 九条道家と幕府の確執については、上横手雅敬「鎌倉幕府と公家政權」(岩波講座『日本歴史』5 中世1所収)1975年、に詳しい。
- 47) 網野氏前掲論文、p.115-21参照。
- 48) 47)と同じ。
- 49) 『国史大辞典』参照。
- 50) 今後他の寺院との比較を詳細に行わねば断言はできないが、普通寺のような東寺の末寺の場合、本寺であった東寺自体の寺院組織の整備が東大寺等の他の大寺院に比して遅れていたため(前掲網野論文参照)、その影響で本寺による伽藍復興が他の寺院の末寺より遅れた可能性もあろう。

(1998年12月7日原稿受理、1999年3月26日採用決定)